

一九九〇年代の不良債権処理問題から福島第一原発事故まで政官財のリーダーたちが責任逃れに終始しているために、産業構造の転換が遅れ、日本経済は衰退の道を歩んでいます。歴史を振り返ると、こういうときに**異常な貨幣増刷**に走りカネをバラマキ出すのは、一つの**体制が終焉を迎える兆候**です。おカネを刷りまくって「パンとサーカス」に多くの人々を夢中にさせている間に、特定秘密保護法とメディアへの圧力、立憲主義を無視した安全保障関連法の成立、改憲への動きなど、過去の戦争への反省を踏まえた戦後民主主義の良いところまでが否定されようとしています。こうした「異常」な状況は否応なしに、今までの自分の人生とは何だったのだろうか、これからどう生きるべきなのだろうかという問いを発生させるのです。

この国では、一九九〇年代の不良債権処理問題から福島第一原発事故まで、経営責任も監督責任も問われません。財政赤字は約一〇五〇兆円、国内総生産（GDP）の二倍に達します。戦時中と同じです。何万年も保管が必要な使用済み核燃料のプールは近い将来満杯になるのに、原発を再稼働させようとしています。これらを負担する**若者の約四〇%は失業者か非正規雇用**になっています。そして「国防軍」を作ろうとしているのは私たち世代ですが、それで死ぬのは若者です。

バブル崩壊以降の「失われた二〇年」の間に、景気対策や金融緩和で**金をだぶつかせ株価**をつり上げては、根本的に解決しなければいけない問題を先送りしてきました。今も同じです。

ただし歴史的に見ると、**ハイパーインフレは、すぐに起きるものではなく、物が極端に不足するときに起こりやすくなります**。たとえば、ひどい物不足になった戦争直後や一九七〇年代の石油ショックなどがそうです。その意味で、また戦争でも起きたらと思うと、最近の日中関係の緊張が不安です。

物価が急上昇するハイパーインフレが起きたら、国債の価値が大きく目減りして国の借金は軽くなります。他方、**個人の現金や貯金も目減りし、資産だけでは食べていけなくなります**。

結婚するにしても、いまや旦那に長期雇用と一定の収入があることを前提に、**専業主婦になれるのはごく一部**。

家族、とりわけ親子の関係は、「無償の愛」から成り立っています。人と人との関係を利得や貨幣に結びつけて考える通常の経済学では、実は一番扱いにくいのが家族、とりわけ親子関係の問題です。お互いに利害打算がないことで、あるいは自分の効用をも譲り渡すことによって親子関係は成り立っているからです。親か子どものどちらかが家庭外で人間関係がうまくいかなかったり、自己実現が図れなかったりするとき、しばしば親子は最も許し合える関係であるがゆえに、互いに支えたり励ましたりします。しばしばそれが勇気を与えてくれます。しかし逆に、親子関係をおかしくしてしまうこともあります。

今の日本社会では、社会が荒れ人間関係が壊れる局面に満ちあふれています。どちらかがうまくいなくなると、お互いに無償の愛を過剰に期待するようになります。折れそうな心を支えてほしいという願いです。しかし、その期待が裏切られると、よその家族とは違っているのではないかと不満をいだくようになります。やがて親子が互いに甘えて当たり散らすことも起こります。ひどい場合には、無仰の愛は「何をしても許される」に転化し、家庭は社会から閉ざされていて法的処罰を受けにくいので、虐待のような行為が起きることもあります。

問題の解決は簡単ではありません。血のつながりがある親子関係において、無償の愛は互いの距離に反比例することがあるからです。一般的に距離が遠くなればなるほど、互いの人間関係は希薄になります。夫婦や恋人でも距離が離れれば離れるほど弱まっていくのが一般的です。ところが、距離が離れれば離れるほど、親子の情愛が強くなることがあります。血縁で結ばれた親子関係は無償の愛が当たり前とされがちですが、単に近くにいれば、無償の愛が深まるわけではないという点で多少厄介です。逆に言えば、距離が縮まれば縮まるほど、憎しみに変わることも起こりうるのです。親子関係ほど実は難しいものはありません。

人間はひとりで生きていけるほど強くはありません。であるからこそ、すばらしいパートナーに恵まれることほど、人生にとってかけがえのないものはありません。しかし、血のつながらない夫婦や恋人の関係は厄介です。同じ家族関係でも、親子関係は、どんなに関係が悪くなり疎遠になっても、血のつながりまでは断ち切ることができません。ところが、夫婦あるいは恋人の関係は血でつながっていないので、関係がひどく悪化して別れば、赤の他人になってしまいます。

妻は夫に従うべきだという「道徳的」な規範意識が薄れてきた現代では、離婚が当たり前になりました。夫婦はお互いに独立した人格を認め合ったうえで、「無償の愛」を確かめ合わなければなりません。といっても、日々の生活では毎日がたんと過ぎていきます。知らず知らずのうちに、互いに意識のズレが生じてしまいます。

あなたは、昔のように見返りを期待せずに夫に「与える」気持ちになれるでしょうか。しばらく続けてみてください。もし、そういう気持ちに戻れなかったら、お互いに「荷物はもういらぬ」状態になったのかもしれない。

あなたが「分からない」という「愛」は、無償で与えることで初めて成り立ちます。

Q. 本当の希望がほしいです

一人で暮らしている高齢者です。年齢は六八歳です。

よく言われることではありますが、「人は希望があれば生きていけるのだ」という言葉があります。でも、今の私には、夢もありませんし、生きていけるような希望もありません。

まだ多少ではありますが、気力と体力は残っているので、家はゴミ屋敷のようにひどくなくなっておりませんし、自立して生活はできています。

退職者関係の組織の世話人など仕事を頼まれれば、断らず雑務をこなしています。

そのようにして雑務をして、ひとつひとつの行事が終わっていきますが、さりとて私になにか充実感があるわけでもなく、やれやれなどと思うだけの日々が過ぎていきます。

こういう相談をすると、よくある回答は、「友だちを持って」とか「趣味を持って」などというアドバイスです。

ですが、私には、そうした通りいっぺんの助言は必要ではありません。

なにか、心に本当にしみてくるような、心の底から高齢者が希望を持てるような、そんな本はありませんでしょうか。あるいは、そんなお話は聞けませんでしょうか。

そういった気持ちから、相談いたしました。

ですが、私は宗教は嫌いです。なぜならこの世には神も仏もいないと思うからです。

(女性 六八歳)

しかし、まだ悩みが残っています。回答者であるにもかかわらず、自分自身も悩みがなかなか解決しないことです。それは、自分の学問が、人生が終わるまでに目指すものにはるかに及ばず、到達できそうにないことです。

(経済学者 男性 六〇代)

著者金子勝にして、こういう境地！